
六花繚乱

來霞

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六花繚乱

【Nコード】

N1721E

【作者名】

來霞

【あらすじ】

古より続く呪術一族である紫水家しすいけの現当主は高校2年の少女、晶蓮うれん。護役である幼馴染み4人、青龍崎聖苑せいりゅうぎせいえん・朱雀山燎すざくやまりよう・白虎風白露はくこふうはくろ・玄武岳昂げんぶたけすばると共に、朝は学校、夜は仕事と大忙し。そんな生活をしてきた晶蓮のもとにこれまた厄介な仕事舞い込んできて……?!

Character Information (前書き)

この作品はフィクションです。

登場人物、技名など実際には存在いたしません。

Character Information

Character Information

シスイ ショウレン
紫水晶蓮

古より続く正統呪術一族の宗家の現当主。高校2年だが、何処か大人びてる。甘い物好き。

セイリュウザキ セイエン
青龍崎聖苑

代々紫水家に仕える青龍崎家の現当主。医大の1年で、基本無慈悲だが何だかんだ言って晶蓮には甘い。

スザクヤマ リョウ
朱雀山燎

代々紫水家に仕える朱雀山家の現当主。高校3年で、熱血漢。白露とは正反対の行動派。

ハクコフウ ハクロ
白虎風白露

代々紫水家に仕える白虎風家の現当主。理大の2年で、何事にも冷静に対応。燎とは正反対の思索派。

ゲンブタケ スバル
玄武岳昂

代々紫水家に仕える玄武岳家の現当主。高校1年で、護役の中で最年少。基本おっとりだが腹黒。

ハナサキ カエデ
花咲楓

今回の依頼人の愛娘。得体の知れない化け物に狙われてる。大人しそうに見えて、お転婆。

シスイ ショウカ
紫水晶霞

晶蓮の父であり、紫水家前当主。通称御前様。自他共に認める極度の楽天家で、楽しいことや面白いことが大好き。

軽設定

紫水家…古から続く正統派呪術一族の宗家

青龍崎家・朱雀山家・白虎風家・玄武岳家…古から代々紫水家に仕える護役の一族達。それぞれ属性を持つ。

紫山家・水崎家・青崎家…紫水家の分家

花咲家…御三家の一つ。大富豪

黒水家…古から紫水家と対立する呪術一族

四神…晶蓮の式獣。滅多に現れない

始まり

始まり

満月の夜は、人ならざる者の力が満ち溢れる夜。
今宵も、満月の魔力に魅入られた妖が闇の片隅で蠢いていた……。

「いやっ！！来ないで！！！」

「俺から逃げれると思うか、人間」

一匹の妖に追い掛けられている少女は息を切らしながらも必死に走った。

何故私がこんな目に……？！

心の中で何度も浮かぶ疑問。

今夜はいつもより、ゼミの帰りが遅かっただけ、ただそれだけなのに。

なのに、何でこんな恐い思いをしないとイケないの？！

走り続けてる所為で、体力はもう限界だった。

だが、ここで止まるわけにはいかない。

止まれば、確実に捕まってしまう。

それだけは、何としてでも回避しなければ。

その思いだけが、走らせていた。

しかし、神は冷たかった。

「……っ！！！」

走りこんだ先が、行き止まりだった。

すぐ後ろには奴がいる。
もう逃げる場所がない。

「どうした？もう鬼ごっこはお終いか？」

にやりと薄気味悪い笑みを浮かべてじりじりと近寄ってくる奴に、少女はジワリと涙を浮かべる。

もう駄目だ、私は殺されてしまう。
絶望と恐怖が、少女を更に貶めた。

「さあって、どうやって料理してやろうかああ？」

妖の手が少女に触れようとしたその時。

ドカツ！！

一本の短剣が少女と妖の間を通り、壁に刺さった。

「誰だ、邪魔するのはあああ？！」

「私の仕事を増やさないで貰いたいものだな…雑鬼？
力を得るために人を襲うとは…雑鬼の風上にも置けない」

凜とした声が、あたりに響く。

その声の主は、妖の後ろに現れた。

月の光で青く輝く青銀の髪が風で靡き、少女の紫暗の瞳が妖を冷たく見据える。

闇と月を背景に佇むその姿は、正に堕天使。

少女の登場に、妖は一瞬怯んだ。

「貴様……誰だ？」

「おや、私をご存じない……？紫水家……と言えば、分かっただけかな？」

「紫水……家だと……?!」

驚愕のあまり妖はその場から動けなくなってしまった。

「知ってるようだな。では、態々言わなくても分かってるだろう？」

ニヤリと不敵に笑う少女に、妖は冷や汗を掻き、後ずさる。

「紫水家……俺たちの間じゃ有名だ……」

「そうか、有名になったものだな。 聖苑、彼女の保護を頼む。
こんな雑魚、私一人で十分だ」

少女の声に、青年 聖苑は軽く頷き、恐怖のあまり地面に座り込んでいる少女を抱き上げ、何処かへ避難した。

「さて、ここからが本番だな。私がここにいる……その意味はもう察しが付いてるんだろう？」

「当たり前だ……紫水家は……俺たち妖にとって天敵だからな」

「そうか。だが、勘違いをするな。私たちは好きで妖を狩ってる訳ではない」

そう言つて少女は、懷から数枚札を取り出すと

「悪靈妖氣退散、妖魔邪氣退散！！」

「ぎゃああああああつ！！！！！！！！」

言霊と共に投げられた札は妖に張り付き、一瞬にして妖を消してしまつた。

あとに残されたのは、妖に張り付いた札のみ。

「ふう」

「終わったのか、晶蓮」

聖苑に呼ばれ、少女 晶蓮は振り向いた。その顔は、いかにも不満だ、と言いたげに眉が寄せられていた。

「何を不貞腐れてる？」

「何で、私が態々雑魚を片付けるために街を走り回らなきゃならない」

本来なら門下生の仕事だ、と晶蓮は愚痴を零す。

「仕方がないだろう。最近、やけに妖が多く発見されている。門下生達だけでは足りないんだ」

「そつえば、あの少女は？」

「あそこだ」

聖苑の視線を辿れば、そこには驚愕の満ちた顔で晶蓮たちを凝視している少女の姿があった。

「大丈夫か？アレはもう消えた。怯えなくていい」

「あつ……助けてくださってありがとうございます」

「いや、今回の件は此方の落ち度だ。」

アレは元々私たちが追っていたんだが、途中で見失ってしまったな……。

貴方に怪我がなくて良かった」

ふつと微笑を浮かべた晶蓮に、少女も安心したのか、気を緩めて小さく微笑んだ。

「だが、何でこんな夜遅くで歩いていた？」

聖苑の問いに、少女は持っていた鞆を軽く持ち上げた。

「ゼミの帰りだったんです。今日は少し授業が終わるのが遅かったんで……」

「今度から迎えに来てもらった方がいい。ここ最近、アレが頻繁に人を襲ってるようだから」

晶蓮は先程妖がいたほうに視線を向けて言った。

人が妖に襲われるのは、コレが初めてではない。もう既に、数件も起きている。

「アレは一体……？」

「雑鬼だ。妖の中で最弱な鬼」

少女の問いにサラリと応える。

「そういえば、貴方の名前は……？」

「晶蓮、紫水晶蓮だ」

晶蓮は真っ直ぐに少女を見てはつきりと告げる。

「私は、花咲楓です」

「楓……いい名前だな。あつ、こいつは青龍崎聖苑だ。私の護役の任についてる」

「聖苑さんもありがとうございました」

「晶蓮の命令だったからな」

楓のお礼の言葉に淡々と返す聖苑に、晶蓮は小さく苦笑を漏らした。

「楓、私たちはもう行かなければならない」

「あ……すみません、引き止めちゃって……」

「構わない。それと今回の件は此方の不備だ。あまり気に留めないでくれ」

ではな、と晶蓮は聖苑をつれて闇の中に溶けるように去っていった。
しまった。

コレが……波乱の幕開けになるとは知らずに…。

依頼1

依頼1

「……今戻った」

ガラガラ……と、玄関の扉を開け、静かに入る。

現在の時刻、早朝4時。普通なら、皆まだ眠りにについている刻限だ。

「また、朝帰り？」

掛けられた声に、ビクツと肩を震わせる。

恐る恐る振り向けば、そこには白銀の髪をし、モノクルを掛けた青年が立っていた。綺麗な金の瞳には、チラチラと怒りが見え隠れしていた。

「た…ただいま、白露」

顔を引きつらせながら「ただいま」を言う晶蓮に、白虎風白露はニッコリと綺麗な笑顔を見せた。

「奥で、燎と昴がお待ちだよ」

その一言は晶蓮にとって重いものだった。怒ってる、絶対あの二人も怒ってる。

そんな晶蓮の心情に気付いたのか、白露は苦笑を漏らした。

「そんなに怒られないと思うよ？前回と違って、今回は聖苑も一緒だったみたいだし」

チラリと清苑に視線を移しそう言う白露に、晶蓮はほっと安堵の溜息を漏らした。

あの二人、朱雀山燎と玄武岳昂は怒らせたら恐い。時に昂は、有無を言わさない黒い笑顔で迫ってくるのだ。

だが、それは晶蓮を大事にしてるからだということもよく分かっているから何も言えない。

「今回は？」

「
雑鬼を数十匹」

白露の問いに、淡々と返す聖苑。どうやら今回の報告らしい。

「ふう、最近やけに目立つね」

「ああ、今はどれもそれほど力はないが……」

こそこそと話し合っている2人に、晶蓮はどうしたものかと考え込んでいると、それに気付いた清苑が

「先に部屋へ行ってる」

と促すので、素直に頷いて、奥の部屋に向かった。

奥の部屋は紫水家当主専用の部屋となっている。つまり、現当主である晶蓮の部屋だ。

そこに入れるのは、現当主と護役のみ。

「……重々しい空気だ」

部屋の扉の前で既に感じる重々しい空気に、晶蓮は溜息を吐きたくなった。

大体、護役たちは皆過保護なのだ。

確かに、普通の少女だと夜中に歩くことは大変危険だ。

だが、晶蓮は若いながらも現当主を勤めるほどの力の持ち主。早々殺られたりはしない。

なのに、護役たちは晶蓮を一人で出歩かせてはくれない。

勿論、気持ちは嬉しいし、大事にされてるのは分かるが…四六時中傍にいられると息が詰まってしまう。

だからこっそり一人で出かけるのだが…帰ってくると決まって雷が落ちるのだ。

「…気持ちは嬉しいんだがなあ…」

小さく息を吐くと扉に手を掛ける。

キィィと音を立てて扉を開くと、中で待っていたのはいかにも怒っているといった表情の燎と、見た目は綺麗な真っ黒笑顔を浮かべた昴だった。

「……ただいま」

「今まで、どこに行ってた？」

挨拶に返されるは燎の問い。紅の瞳が、射抜くように晶蓮を見つめる。

「 雑鬼退治」

「こんな時間までですか？確か、屋敷を出て行かれたのは7時ごろでしたよね？」

今度は昴に問われる。ニツコリと笑っているが、目が笑っていない。

「……雑鬼が、人を襲っていたんだ。放って置けるわけがないだろう」

「ですが、僕たちと約束したでしょう。一人で出かける際は、遅くても二時には帰ってくると」

忘れたとは言わせませんよ、と昴は黒い笑顔で晶蓮に迫る。

「そこまでにしといてあげなよ、2人とも」

まだまだ説教しそうな2人を止めたのは白露。その後ろには聖苑もいる。

「止めないでください、白露」

「昴、今回は蓮一人で出かけたわけじゃない。聖苑も一緒だったんだよ」

「ああ、俺と一緒に居た。だから、説教はそこまでだ、昴」

2人にそう言われ渋々頷く昴に、晶蓮は助かったと安堵した。

「なんだ、聖苑もいないと思っていたが、ついて行ってたのか」

「まあ…こいつの行動パターンは分かるから」

「そう言えば、お前が一番蓮と付き合いが長いんだよな」

燎の言葉に、白露と昴も賛同する。

「そうだね、俺が蓮に会ったときはもう傍には清苑がいたから」

「じゃ、一番短いのは僕ですね。僕年下ですし」

3人の言葉に、聖苑はチラリと晶蓮に視線を向け

「あいつとは…生まれたときから一緒にいるからな」

と誰にも聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「で、何で今回出かけたんだ？」

燎の問いに、晶蓮は途端に不機嫌そうに眉を寄せた。

「父上が…本来は門下生の仕事を、人手が足りないから、と私に回してきたんだ」

「ああ…そういえば、分家の方でも人手不足してると聞いてますよ」

昴は、パラパラと手帳を捲りながら告げる。

ここ最近、妖が異常発生している所為で、宗家の紫水家も、分家の紫山家、水崎家、青崎家も極端な人手不足に陥っている。

その為、普段あまり動かない各当主も妖退治に駆けずり回っている

状況だ。

「だが、御前様が直々仰るとは…何かあるのかな？」

「分からねえが、あのお方のことだ。何かあるんじゃないか？聖苑はどう思う？」

「……今回の異常発生には何かしら裏がある、と御前様は考えておられるんだ。で、それを愛娘である晶蓮に解決して来い、と言いたんじゃないか？」

あの方が言いそうなことだ、という聖苑の言葉に、その場の全員が納得。

「父上は、私の事を過信している。いくら私でも限度というものが有る事を分かって欲しいものだ」

はあつとあからさまに溜息をつく晶蓮に、四人は苦笑を漏らすしかない。

晶蓮の父、紫水晶霞しすいしょうかは自他共に認める極度の楽道家で、楽しいことや面白いことが大好きな人だ。そして、晶霞の最大の楽しみが『愛娘で遊ぶ』ことだった。

いつもいつも父親に弄ばれて駆けずり回ってる晶蓮には一種の同情をも感じる四人だが、口には出さない。

「だが、父上の判断は正しいかもしれないな」

「と、言つと？」

「……普通、雑鬼は人を驚かすことに生きがいを感じているはず。それが人を襲うなんて…今までに聞いたことがない」

「確かにそうだな。『人が雑鬼に襲われた』というのはごく最近だ」

晶蓮の言葉に、燎も同意するように頷いた。

「…やっぱり使役されている、ということかな？」

「その線が濃いだろうな。で、どうするんだ？」

聖苑の視線に気付いた晶蓮は、考える素振りを見せた。

「とりあえず、まずは情報を集めないとな。燎、白露…頼めるか？」

「了解」

「分かった」

晶蓮の言葉に、燎と白露は頷いた。

「聖苑と昴は私と共に来てくれ」

「ああ」

「分かりました」

聖苑と昴も頷く。

「じゃ、私は学校の支度をするから全員自室に戻れ」

「はっ？」

「えっ、蓮…学校に行く気？」

驚いた様子の四人に、晶蓮は不思議そうな顔で首を傾げた。

「当たり前だろう？」

「蓮様、今日寝てないんですよ?!」

「それがどうした？」

「途中で倒れたらどうする」

「私はそんなに柔じゃない。それに、こんなのいつものことだろう」

そう言いながら シッシツと余人を追い出すように手を振る晶蓮に、
渋々各々の部屋に戻っていく四人の姿がそこにあった。

.

依頼2

依頼2

「おはよー蓮ちゃんっ！！」

「おはよう、れいりん零厘」

晶蓮が教室に入ると、青紫の髪を靡かせて零厘がやって来た。彼女は、晶蓮の家の事情を知る唯一無二の親友だ。出身が中国の道士だから、なにかと晶蓮と気が合うのだ。

「蓮ちゃん、何かあった？」

「あー……父上が、な」

「ああ、晶霞おじ様か……」

蓮ちゃんも色々大変だねえ、と零厘は晶蓮の頭を撫でた。晶蓮にこんなことが出来るのは、護役を除いて零厘だけだ。

「零厘、最近の雑鬼たちの動向について、何か知らないか？」

「ああ……最近凶暴化してるって言う噂の。そういえば、父様が『誰かに使役されてるな』って呟いてたけど」

「やはりそうか……」

「でも、使役してるのは『人間じゃない』って」

零厘のその一言に、晶蓮は眉を寄せた。

「それはどういう意味だ？」

「うん…私もよく分からないんだけどね？雑鬼から漏れる力が…人間』のものじゃないんだって」

「…雑鬼が力の強い妖に使役されてる可能性がある…って事か」

「多分……。でも、こういうケースは珍しいんでしょ？」

「日本では…珍しい部類に入ると思うが」

今まで雑鬼を使役する妖なんて聞いたことがない。
一体どういうことだ。

晶蓮は頭を抱え込んでしまった。

その時、ピンポンパンポーンと放送が入った。

『2年1組の紫水晶蓮さん、1年1組玄武岳昂くん、至急職員室まで来てください。繰り返しします……』

「……何やつちゃったの、蓮ちゃん」

「何もやっていない」

突然の呼び出しに、晶蓮は些か不機嫌そうに顔を顰めた。
呼び出しをされる理由が、晶蓮にはない。

なのに、何故呼び出されなければならないんだ。
機嫌急降下中の晶蓮を、零厘は職員室まで引っ張っていった。

職員室前まで来ると、既に昴がいたので、零厘は昴に晶蓮を任せ、先に教室に戻っていつてしまった。

「……………」

「ご機嫌斜めですね、蓮様」

「当たり前だ。理由もなしに呼び出されて気分がいいはずがない」

「気持ちは分かりますが、今回は我慢してください。御前様の呼び出しですから」

「余計機嫌が悪くなった」

そう言つて眉を寄せるものの、ちゃんと呼び出しに応じる晶蓮に、昴は微笑んだ。

何だかんだ言つても、晶蓮は晶霞を尊敬しているのだ。

「では、入りますよ?」

晶蓮に声を掛け、トントツとノックすると『入れ』と返事が返ってきたので、ガチャ…とドアを開けた二人の前に佇んでいたのは、晶蓮の父であり、紫水家の前当主である紫水晶霞その人だった。

「2人とも久しいな」

「そうですね、父上が出て行つてからもう1年と8ヶ月経ちますから」

「相変わらず、男勝りの所は治ってないようだな」

「お父上も相変わらず母上を困らせているようですが？先日母上
が嘆いておられましたよ？」

「一体何しでかしたんですか、と晶蓮が睨みつけるものの、晶霞は飄
々とした態度で晶蓮と昴を見ている。

「お前たちも気付いているだろうが、現在の状況は深刻なものにな
りつつある」

「雑鬼が使役されてる…と言っ件ですか？」

「なんだ、知ってたのか。相変わらず情報回りだけは速いんだな」

「放って置いてください。で、本題は一体なんですか？」

「下らない事なら許しませんよ、と怒り心頭の晶蓮に、晶霞は面白そ
うに口元を吊り上げた。

「お前に依頼が来た。『花咲家』は知ってるだろう？」

「御三家『花咲家』ですか」

「そうだ」

晶霞が肯定すると、晶蓮は顔を顰めて見晶霞を見つめる。

「一体、御三家が何用ですか」

「実は：依頼人の愛娘が、妖の類のものに狙われているらしい。しかも、そのものは大量の雑鬼を操っていたと聞く。この依頼と今回の件は何かあると思わないか？」

扇を広げ口元を隠しながら晶蓮に告げた。その目は面白そうに細められている。

大して晶蓮は不満そうに晶霞を睨みつけた。

いつもいつもそうだ。この男は家を去って行ったにも拘らずこうして厄介事を毎回持ってくるのだ。

「その依頼…拒否権は」

「ない」

きっぱりはつきり言われ、晶蓮は怒りを通り越して呆れた溜息しか出てこない。

こうなれば、もうやけだ。

「分かりました、その依頼引き受けます。用件が済んだのでしたら私はもう戻りますから」

晶蓮は早口でそういうと、踵を返し教室へ帰ってしまった。

そんな彼女を見送った後、おもむろに晶霞は昂に視線を移した。

「今回の依頼は…とても危険なものだ。出来れば、あの子にはさせたくなかった」

「……そうせざるを得ない事情が？」

「依頼人の直々の申し出でな。はじめは断りを入れていたが、どう

もしつこくて」

「蓮様を名指しで？」

「ああ」

「……その依頼主凄い方ですね。御前様を負かすなんて」

感心します、と告げる昂に、晶霞はばつの悪そうな顔をしながら窓から外を眺めた。

「あの子は確かに強い…その力、技術、私を遥かに超えるだろう。しかし、如何せんあの子はまだ子供。まだまだ未熟者だ。あの子をしっかりと護ってやってくれ」

「勿論です。僕達にとって…蓮様は掛け替えのない、御守りしたい方ですから。この命に賭けても必ず御守りいたします」

「頼んだぞ…。おそらく、今回の件はあの子にとって今迄で一番厄介な依頼になる」

「まさか、あの者達が関わっている…と？」

「まだ確証は出来ん。だが、今回の手口…あの者達の可能性が高い」

晶霞は苦虫を噛み潰したように顔を歪めた。

本当なら、こんな仕事を晶蓮に回すべきではなかった。

だが、依頼人の直々の申し出に頷いてしまったのは、紛れもなく自身だ。

「晶蓮……気をつけろよ」

ガラガラガラ……。

「あつ、戻ってきた」

「零厘……」

教室に戻ってきた晶蓮に早速駆け寄る零厘。やはり心配していたのか、神妙な顔をしていた。

「一体何の話をしてたの？」

「……父上が依頼を持ってきたんだ。とても厄介な依頼を」

「厄介な依頼？」

一体なんだろうと首を傾げる。どんな依頼も文句を言わず嬉々として片付けてる晶蓮がこんなことを言うなんて珍しい。

「零厘は『御三家』って知ってるか？」

「ああ、世界規模の大富豪たちのことですよ？」

それがどうしたの。

零厘は不思議そうな顔で晶蓮の言葉を待った。

「今回の依頼主は、その『御三家』の一つ『花咲家』なんだ」

「えっ……」

晶蓮の言葉に固まる。

御三家が… 晶蓮に依頼をしたというのか。

あの、呪術師や道士の類を、穢れた者のように見下すあの御三家が。

「どういう… こと？」

「依頼主の愛娘、『花咲楓』が妖の類のものに狙われているらしい。娘を護れ、と依頼が父上のところに來たんだそうだ」

「おじ様… 了承したの？」

「ああ、今回の依頼は今の雑鬼の件と関わっている可能性が高い、と見てな」

私は断りたかったが、と呟く晶蓮の眉間には皺が寄っていた。

「断れない依頼なんでしょう？」

「……ああ。これから依頼主の元に行く。先生にはうまく言っといてくれ」

「了解、気をつけてね… 晶蓮」

「ん…」

晶蓮は鞆を持つと、教室を静かに出て行った。玄關まで行くと、既に昴が待っていた。

「昴、待たせた」

「いえ、僕もさっき来たところなんで。そういえば、さっき清苑から電話がありました」

今こちらに向かつてるそうですよ、という昴に、晶蓮は頭を抱え込んだ。

「大学はどうした、大学は」

「何でもレポートも作成し終わって暇だから付いていくとか」

「…あいつは昔から要領良いからな」

仕方ない、と言いながら晶蓮は校門前で昴と共に聖苑を待っていた。

「で、今回の依頼の詳細は？」

「はい、つい最近なんですけど…依頼人の娘がある人間外の者に求愛行動されているようなんです」

「求愛行動？」

「はい、一は花束やプレゼントなど…普通なことからだんだんとエスカレートしまして。雑鬼に浚われたり、襲われたりするようになってしまうそうで、見るに見かねた依頼人が御前様に依頼されたんです」

パラパラと資料を捲りながら昴は告げる。

「……人外のものだとなんで分かったんだ？」

「その方は…半透明の体だったんですよ。そして、人にはついていない羽根が付いていた…」

「羽根…カラス天狗とかその類か？」

「それはなんとも言えません」

そうか…と晶蓮は小さく溜息を零した。
結局、詳しい情報は何もないのだ。

「何を落ち込んでる」

「聖苑」

溜息を零し俯いていた2人に声を掛けたのは、大学からきた聖苑だった。

「実は、今回の依頼の詳しい情報がなくて……」

「それより、大学はどうした聖苑!!」

昂の言葉を遮り怒鳴る晶蓮は、きっと聖苑を睨みつけた。
そんな彼女に、聖苑は小さく溜息をつき、ぴらっと紙を一枚取り出して晶蓮たちに見せた。

『青龍崎聖苑は紫水晶蓮の傍付きとして、花咲家訪問に付き添うこと。晶霞』

でかでかと書かれたその文に、晶蓮は米神を押さえた。
言いたいことは幾らでもあったが、清苑に言ったところでどうになるわけでもない。

時間の無駄だと感じた晶蓮は、無言で聖苑が乗ってきた車に乗り込んだ。

晶蓮の後に続いて、昴、聖苑も乗り込んだ。

「しかし、父上も面倒なことをしてくださる」

「まだ怒ってるんですか」

「当たり前だ。ろくに帰ってこない癖して、こういうことは私に押し付けてくる…身勝手にも程があるだろう」

母上がどんな思いで待っているか、父上は知らないんだ。

晶蓮はムスツと不機嫌そうな顔をして社内から外を眺めた。

一年前、晶霞は誰にも何も言わず屋敷を出て行った。晶霞の護役や晶蓮はおるか、妻である白蓮にさえ何も告げなかった。

その時の母の悲しげな表情を良く覚えている晶蓮は、母を悲しませる父が好きではない。

つい最近になって、連絡はしてくるようになったが、それで母は悲しげだ。

いつも一人で抱え込み無茶をする晶霞が心配だ、と白蓮は晶霞の身を案じていつも悲しげに庭を見つめていた。

「母上が…可哀想だ。ろくに姿を見ることが出来ず、時折来る連絡では無茶をしていることを聞かされる。娘の私から見ても、母上が

気の毒で仕方がない」

全て父上の所為だ、と苦々しげに呟く晶蓮を聖苑は運転しながらチラリと見た。

「だが、御前様も何か事情があると、晶蓮も奥方も知っているだろうか？」

「そうですね、あの奥方溺愛者で知られる御前様が、人知れず出て行くななんて…何か深い事情があるんですよ」

聖苑、昴の言葉に晶蓮はますます顔を顰めた。

「そんなこと、私と母上が一番良く知っている！！私が許せないのは」

母上にも何も告げずに出て行ったことだ…と言いかけてやめた。何故、父が母にさえ告げなかったのか、本当は痛い程よく分かっているから。

そして、その判断が正しいものだ、とちゃんと理解しているからだ。黙ってしまった晶蓮に、昴と聖苑は心配そうに様子を見ていた。

「　　　そういえば、蓮様には正装に着替えていただかないといけないんです。聖苑、先に邸へ」

「了解」

聖苑はすぐさま進路を邸へ向けた。

「御三家の前では正装か……」

面倒だ…とつぶやく晶蓮に昴は苦笑を漏らした。

「御三家は我々を毛嫌いしていますからね、仕方ありません」

昴が晶蓮を宥めている間に邸へ到着したのか、車が停まった。

聖苑がドアを開けたのを確認すると、晶蓮は車から降りさつさと屋敷の中に入ってしまった。

その様子に、相当ご立腹だ…と清苑と昴は小さく溜息を吐きながら今ここにいない前当主を恨みたくなった。

しかし、彼らも正装をしなくてはならず、もう一度深く溜息を吐いてから各々の部屋に戻り身支度を整えた。

十分後、門に集まった三人は中国風の服に身を包んでいた。

「蓮様のそのお姿…久々に拝見しますね」

「この服は目立つからな、あんまり着たくない」

晶蓮の正装は、淡い紫の裾の長いチャイナ服に白いカンフーパンツだ。紫水家はその名の通り、高貴な色である紫を正装色としている。聖苑は蒼色、昴は緑のチャイナ服に白いカンフーパンツだ。色はそれぞれの家系で決まっている。

「では行くか…御三家『花咲家』へ」

本当は行きたくない、言いたげな顔をしつつ告げられる言葉に、清苑と昴は「是」とつき従った。

.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1721e/>

六花繚乱

2010年10月9日23時04分発行